

トーンハレ管のマーラー・シリーズ第2弾は交響曲第1番(巨人)。この日は前半が現代曲でオケを鳴り響かせ過ぎたせいも、冒頭のテーマに緊迫感が足らず、少々心配なスタートだったが、チェロが美しい響きを聴かせ始め、弦楽器が際立つとトーンハレの音色が戻って来た。

マーラーの3拍子らしさが心地よい2楽章、華やかな3楽章を経て、特筆すべきは4楽章の葬送行進曲だ。重厚で、何とユダヤ的だったことか。

(中東生)

トーンハレ管のマーラー・シリーズ

トーンハレ管弦楽団の今年のメインテーマ、マーラーのライブ録音シリーズが、《復活》で幕を開けた。

オケと合唱団で舞台がはちきれそうな中、ジンマンが入って来るのも見えないくらいだったが、その騒然とした雰囲気、指揮棒と共にピンと引き締まる。最初から、聴衆の心を掴む演奏だった。

第1楽章の葬送行進曲の部分で、もう少し音楽に深みが欲しかったが、それ以外は完全に彼の解釈に引き込まれた。熱くなるところと、虚脱する部分のバランスが素晴らしい。そしてこの楽章のテーマ、「私たちは、どこから来て、どこへ行くのか、そして何故なのか」という、「？」を感じさせるように音を閉じた。

最終楽章は情景が想像できる音づかいで、まるで映画を観ているかのようだった。スイス室内合唱団の柔らかい響きの中、ハンゼの声が際立つ。肉声を得て、完結したオケの響きはどんどん膨らんでいき、最後の答えにたどり着いたように80分の大曲が終わった。だんだん大きくなる拍手、客席からも、床を踏みならず靴の首、次第に一体となりリズムカルになっていく拍手。マーラーの素晴らしさを再確認した。